学びやタイムスリップ

㊸ 湯川秀樹博士の墨書（昭和時代）

児童を励ます実直な字

日本で初めてノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、東京に生まれ、1歳のときに京都に移りました。1919（大正8）年に上京区の京極尋常小学校を卒業しています。幼少期には祖父から教えられ漢籍の素読を始めました。難しい漢字の群れがページを埋め、湯川少年にとっては恐ろしく硬い壁であったといいます。つらくて逃れたい勉強でした。

しかし、後にこの素読の経験が決して無駄ではなかったと語っています。文字への抵抗をなくし、漢字に親しんでその後の読書を容易にしてくれたものとなったのです。

そのほか、小学生のときには書家の山本竟山（きょうざん）に書を学び、祖父からは四書五経を口授されるなどして漢学を深めていきました。老荘の思想に心動かされ、李白の言葉に共感し、生涯古典文学や東洋の思想などへの思索を大事にしていました。

湯川博士にとってこれらと物理学とはまったく別のものではなく、東洋思想の言葉などを通して、物理学への思索を深めることも多かったといいます。

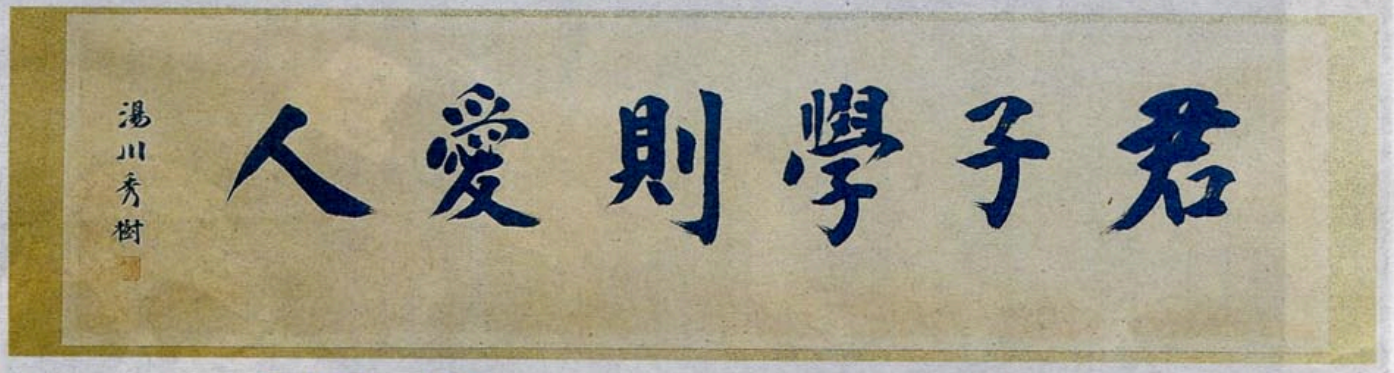
母校である京極小には、湯川博士の墨書が今も残されています（写真）。ノーベル賞受賞の3年後、1952（昭和27）年に同窓生の依頼で寄贈されたものです。

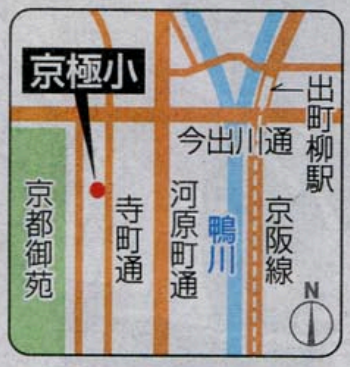
書かれたのは「君子学則愛人」の文字。君子が道を学べば人を愛するようになる、という論語の一節で学びの大切さを説いたものです。力強く、子どもを励ますような実直な字で書かれているのが印象的です。

あるいは、自身の幼少期に論語を素読したことを思い出しながら書いていたのかもしれません。祖父と一緒に「シ、ノタマワク…」と声を出して本を読んだ経験が、研究人生にとって大きな礎となったことを物語る作品です。

1969（昭和44）年にあった京極小の創立100周年には湯川博士記念講演会が行われました。そのときの写真や、「君子学則愛人」の墨書とともに、今も京極の子どもたちに偉大な先輩として尊敬を集めています。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）





湯川秀樹「君子学則愛人」（1952年、京極小蔵）